

02:イチゴと、恋の観察者

昇りはじめた太陽が、窓の外から暖かな空気を運ぶ。

子どものころから、二人は俺に対してとても過保護である。

二人に比べ、俺はかなり控えめで、テンポも遅く、口数も少ない。頭ではいろいろ考えていて、たくさんの思考が巡るが、それを言葉にするのが苦手なので、よく人を怒らせてしまう。

「言いたいことがあるならはっきり言え！」や「無視するな！」「なんだその態度は！」などなど、ちゃんと考えて行動や言葉を発しようとする前に咎められてしまうことが多い。ぽんぽんと素早く言葉にすることができて羨ましい。

周りから責められていると必ず二人が助けてくれるし、詰められる前にフォローしてくれる。ゆっくり考えれば、俺がきちんと自分の意見を伝えられることを二人は理解していた。時間が許す限り、俺の行動や言葉を待ってくれる。本当によき理解者なのだ。

この二十年生きてきて、ずっと支えられている。感謝してもしきれない。だから、俺も二人の役に立ちたいし幸せを手助けしたいと常々思っている。今のところはお世話になりっぱなしなのだが。

「そうだ、翔ちゃん。今日の夜さ、友達とお店行ってもいい？」

翔一が働いているバーは、紹介制でお店に来たことがある人じゃなければたどり着くこともできない隠れ家バーだ。それに紹介制だから素性もある程度わかるということで、素敵な出会いを求めてやってくる人が多いらしい。

「いいけど、ほとんどゲイしかいないぞ」

晴香は見た目も言動も女の子らしいので、女性の友達が多かった。

とくに限定しているわけではないらしいが紹介制ということもあり翔一が働くバーはゲイの男性客が集まりやすい。

「うーん、大丈夫。友達っていうのは男の子なんだけどね、そういうお店に行きたいけど、勇気が出なくて行けないんだって。翔ちゃんのお店に来る人はちゃんとした人が多いから、初めてはそういうところのほうが良いかなって思って。僕も付き添ってあげられるし」

俺はふたりの会話を朝食をモグモグしながら聞く。初々しく頑張って勇気を出している晴香の友人を想像してみた。

照れながらも一生懸命に話す様子を思い浮かべると感情の流れやその後の展開がどうなっていくのか、全く関係のない俺がワクワクしてしまっている。小説じゃわからないリアルを近くで観察したいな。そんな妄想に浸っている俺をよそに晴香と翔一の会話は続く。

「二人で来んの？」

「ううん、もう一人は女の子。同じ学校の子。最近よく三人で遊んでるんだ」

「まあ、三人で来るならいいぞ。その女の子にはゲイばっかだから出会いには期待すんなって言っとけよ。あーそういえば、今日はなんか目立つ連中が来るって言ってたな。店長の鼻息が荒かった。まあ、新規の客だし、その中にいいやつがいるといいな」

「えー！ めっちゃ楽しみ」

晴香の鼻息も荒くなりそうだな。

俺は会話には混ざらずとも、店長の鼻息と晴香の鼻息を想像して可笑しくなった。

「あとひとりにはなるなよ。いくら紹介制で比較的治安の良い店だからって、そうじゃないやつも中にはいるし、夜遅い時間にひとりになるのは危ないからな！ 仕事中は、すぐには助けてやれないから」

翔一は優しい。俺たち三人の中で本当に長男のような存在だ。晴香は二番目で、俺は……末っ子。俺はいつも二人に甘えてばかりだが、翔一は晴香にも過保護で、晴香は翔一に甘え、俺に過保護だ。

「朔もメシ食いに来るだろ？ 晴香もいないなら、お前ちゃんと夕飯食わないだろうから、来いよ。今朝、店長がめちゃうまいイチゴもらったって言ってたから、今日の夜はまだあると思うぞ。店長も朔に甘いし、たぶんタダで食わせてもらえる」

放っておいたらきちんと食事をとらない俺に翔一は、大好物のフルーツでおびき寄せる。そして、割と早めに頷く俺。ちょろい。

ちょっと晴香の友人の動向も気になるところだし。いや、決してのぞき見して観察したいわけでは……なくはない。ちらっと、横目に見る程度は許してほしい。だって、こんな機会滅多にない。まさに、絶対これから何かが始まるであろう瞬間に確実に居合わせることが出来るなんて「観察させてください」と土下座してお願いしてもいいぐらいの好条件じゃないか。

「えー、朔ちゃんだけずるい！ 僕も食べたい！ おいしいイチゴ」

「わかってるって。ちゃんとお前らにもやるって」

ブーブー文句を言う晴香に翔一は、ケタケタ笑いながら立ち上がり頭を撫でる。

「じゃあ、俺寝るわ。朔、七時には来いよ！ イチゴが待ってるからな」

こくこくと頷く俺をしっかりと確認して、翔一は自室に入っていった。

「わー、時間ヤバ！ ゆっくりしすぎちゃった！ 朔ちゃん、僕も行くねー！ イチゴ楽しみだねー！ また、夜にねー！ 行ってきたーす」

慌ただしく食器を片付け、手を振る晴香に俺はささやかに手を振り返した。リビングに取り残された俺の周りは先ほどと打って変わって、静けさに包まれた。

おもむろにテーブルの隅に置いていたスマホに手を伸ばす。

そろそろ、パンツ注文しなきゃなー。十枚セットの安いのあるかな？ ついでに新作の恋愛小説も買いますか。俺はまだ知らぬ、俺自身の感情や欲望を震わすための観察や勉強に余念がない。……イチゴ楽しみだな。しかも、出会いの現場を見れるかもしれないんだよな。いやー、どんな物語が始まるのか、今からわくわくするなー。

脳内独り言を延々としている俺は、いつもの日常ががらりと変わる方向へ、自ら足を踏み入れることになるなんて——そうしたくなるなんて、予想もしていなかった。